

淡路地域のタマネギ圃場から採集したネギアザミウマの薬剤感受性

2020年に淡路地域のタマネギ産地でアイリス黄斑ウイルス（以下、IYSV）によるタマネギえそ条斑病（写真）が広域的に発生した。本病害による被害拡大を防ぐため、媒介虫であるネギアザミウマをタマネギ圃場から採集し、薬剤感受性を調査すると、一部の殺虫剤で圃場ごとに薬効の違いが見られた。

内容

2020年5～7月、タマネギ、ネギ、ユリ、トルコギキョウにおいて、本県で初めてIYSVによる病害が認められた。特に淡路地域のタマネギ産地では、中晩生種を中心に本病害が広域的に発生し、発生面積は1,300ha（淡路地域の作付面積の約80%）と推察された。

IYSVの媒介虫であるネギアザミウマは様々な植物に寄生する上に、薬剤感受性の低下が全国的な問題となっており、淡路地域でも殺虫効果の低下が疑われる事例が散見されている。IYSV感染拡大防止に向けた現地の防除指導に供するため、2021年5月にタマネギ圃場から採集したネギアザミウマを用いて、現地で利用されている8薬剤に対する薬剤感受性を調査した。

その結果、アセフェート水和剤やプロチオホス乳剤、及び市販されて間もないフルキサメタミド水和剤やフロメトキン水和剤では、いずれの地点でも殺虫効果が高かった。一方、シペルメトリン水和剤、アセタミプリド水溶剤等、一部の薬剤では、殺虫効果が低い地点が確認された（表）。

今後の方針

本結果を活用し、各地域の感受性実態に応じた薬剤選択を指導するとともに、IYSVによる被害発生を抑制する効率的・効果的な薬剤防除体系を構築する。また、物理的防除手段を組み合わせ、殺虫剤のみに依存しない総合防除体系を確立することで、薬剤抵抗性の発達を防ぎ、IYSV感染拡大防止に向けた取り組みを推進する。

富原 工弥（病害虫部）

（問い合わせ先 電話：0790-47-1222）

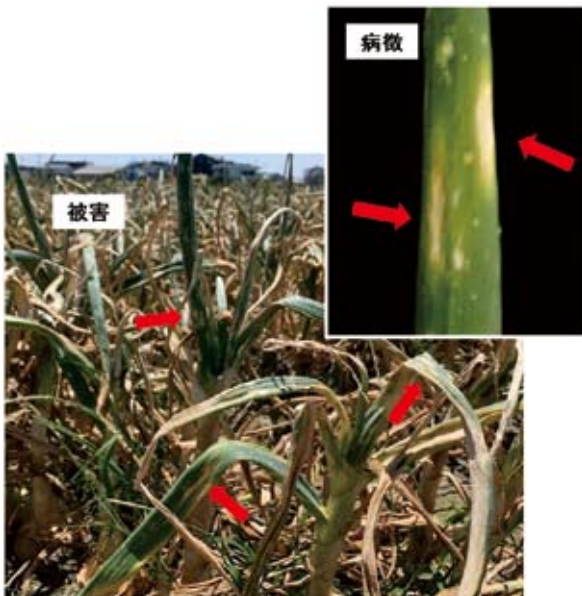


写真 タマネギえそ条斑病の病徴及びタマネギ被害（矢印：病斑）

表 各殺虫剤に対するネギアザミウマの薬剤感受性

| IRACコード※ | 薬剤名 | 希釈倍数 | 地点A | 地点B | 地点C |
|----------|------------|-------|-----|-----|-----|
| 1B | アセフェート水和剤 | 1,000 | ◎ | ◎ | ◎ |
| | プロチオホス乳剤 | 1,000 | ◎ | ◎ | ◎ |
| 3A | シペルメトリン乳剤 | 2,000 | ○ | ○ | × |
| 4A | アセタミプリド水溶剤 | 2,000 | ○ | ○ | × |
| 5 | スピネトラム水和剤 | 2,500 | ◎ | ◎ | △ |
| 30 | フルキサメタミド乳剤 | 2,000 | ◎ | ◎ | ◎ |
| UN | ピリダリル水和剤 | 1,000 | ○ | ○ | △ |
| 未 | フロメトキン水和剤 | 1,000 | ◎ | ◎ | ◎ |

成虫を用いて試験を行い、その補正死亡率により、◎～×の4段階で殺虫効果を評価した。

◎：90%以上100%以下
○：70%以上90%未満
△：40%以上70%未満
×：0%以上40%未満

※IRACコード：国際的に取り決められている、殺虫剤の作用機構による分類